

顔と名前が一致して、頼んだり頼まれたりの関係があれば 大抵の困り事は解決できるのでは

和歌山県認知症介護指導者 川口利恵・黒木直子

キーワード: 認知症の理解・権利擁護・地縁
地域包括ケアシステム

活動の概要(活動の主体:地域住民として)

【活動目的】

地域に誇りを持ち、安心して年をとれる町を作る。このため、顔と名前が一致して、お願いしたりされたりという関係を作る。皆が認知症を我が事と意識し、誰もが思いや権利が損なわれず自分らしく暮らせる町を目指す。

【活動内容】

地域の顔見知りを増やし、有志で他の事業所の介護職、ケアマネ、医師、薬剤師、行政などの方たちと良い町にしたいと月に2回情報共有の会を持つ。

活動のきっかけ、背景

指導者研修後、単に目の前の認知症ケアだけでなく、その人の背景にある家族、知人、地域での暮らし、アイデンティティーとなる地域で築かれてきた文化のみならず地域の歴史など全てが健康である為に必要な要素であると考えられるようになる。行政、支援者も個々には良い仕事をしたいと思っているが、方法が分からず自信が持てない現状を知る。そこで、単に支援する側される側ではなく、人の支えや関わりによる安心できる人間関係が皆必要で、この町がちょっとした親切でもう少し住みよい町になるという伸びしろの二つを信じる様になる。

活動の経過と成果

【活動の経過】

今年1月に、初回の集いを行った。地域の医師、老健経営者、ケアマネジャー、医療機器営業、介護職、看護職など10名程度が集まり目的などを共有する。以後、月に2回集まり、困難事例などを相談することで顔見知りが増え、相談しやすい関係ができる。会以外の時に、個人的に連絡して相談する事で解決する事案もあつたり、他事業所との連携も図られ、互いの事情を察して融通を聞かせるなど、関係性が深まっていった。しかし、3月末になり、新型コロナウイルス感染症の流行により、集まりができなくなる。

秋になり集いを再開したが参加者が徐々に少なくなる。集まるテーマや継続性に課題を感じるようになる。テーマを変えるなど参加意識を高めるよう試行錯誤する。遂には継続性やテーマについて話し合いを行う様になった。そこで、何故集まりを起こしたのか考えた。集いの目的は「人との繋がりで大抵の事は解決できる仕組みづくり」であり、地域の問題に地域の人の抜きで考えても、施しか自己満足では無いかという結論に至った。

【活動の成果】

認知症高齢者の支援困難事例についての地域包括センターからの相談、地域ケア会議での認知症ケアの講義、サポーター養成講座の依頼が増えた。地域の人々で那智勝浦コミュニティナースの会が立ち上がった。参加45名。専門職だけでなく、包括職員、町保健師、地域の商店に勤める人、飲食関係と多様な人が参加。結果、家族以外の地域住民の施設への面会や訪問が増えた。事業所の利用率向上にもつながった。

活動の結果、ダイレクトに自事業所の収益が向上した。それより大きく変化したのは事業所が地域に開かれた事と、その必要性への意識である。しかし、達成状況としては街づくりへのほんの一步であり、目標は、地域に誇りを持ち安心して歳を取れる町であり、未だ達成は先である。しかし、ビジョンを持たた事で必ず良い方向に進んで行けると信じている。

今後の展望

単に目の前の課題だけでなく、その人の背景にある家族、知人、地域での暮らし、アイデンティティーとなる地域で築かれてきた文化、歴史、福祉、行政、病気があろうと無かろうと、全て心が健康である為に必要な要素であるということの再確認が出来た。その理念、目標をできるだけたくさんの人に、アナウンスし、共有してゆく事で、小さい町ならではの地縁を活かした安心して年をとれる町づくりを叶えてゆく。

こちらの事例報告は、「認知症介護指導者養成研修等のアウトカム評価に関する調査研究事業報告書(令和2年度老人保健健康増進等事業)」の巻末資料【認知症介護指導者の活動事例】からの抜粋です。